趣味の延長線にあるような店が生存できる懐（ふところ）の深さが好き。

むさしのTalk

美内すずえさん

美内すずえ（みうちすずえ）
1951年生まれ。大阪府出身。漫画家。16歳で漫画家デビュー。
1976年から連載を開始した『ガラスの仮面』（白泉社。現在も連載中）は各界から絶大な支持を受け、ドラマ化をはじめ、坂東玉三郎や蜷川幸雄の演出により舞台化もされている。葦（あし）や葦船（あしぶね）に関しても造詣が深くさまざまな活動を行っている。

35年の月日を経てなお、あまたのファンを魅了し続ける漫画『ガラスの仮面』。作品とほぼ同じ年月を武蔵野市で暮らす作者の美内すずえさんに聞く、武蔵野市の居心地の良さ。

高校2年生で漫画家デビューを果たして、卒業と同時に大阪から上京。その後いったん実家に帰ったりもしましたが、約10年間は住む場所を点々と変えていました。千葉の新興住宅地に住んでいたときは、家の周りに食べ物屋さんがまったくなくて、あっという間に5キロも痩（やせ）せてしまったのに、吉祥寺に引っ越してきたら店がたくさんあるので途端に太る、太る（笑）。早いもので、それから30年以上がたちしました。

以前は個性的な喫茶店が多くて、よく出かけては仕事をしましたね。特に吉祥寺のプチロードにあったクラシック喫茶は、お客さんが曲に真剣に耳を傾けているので椅子を引くのも音を立てないように気を付ける、やや緊張する店でしたけれど、漫画のアイデアを練るのにとても良い場所でした。最初は音楽が耳に届いているのに、ノッてくるとまったく曲が聞こえなくなる、そんな風に気持ち良く集中できる店でしたね。

今は主人が経営する喫茶店で過ごすことが多くなりましたが、街歩きは好きでよくしています。東急百貨店の裏辺りはごちゃまりとした店がいろいろあったりするので、お気に入りの散歩コースです。商売っ気のある店もそれはそれで良いけれど、売ろうという以前に「私が作ったものを見て」っていうような店がたくさんあるでしょう？　そういう感じが何だかいいなって思うんです。趣味の延長線上にあるような店が生存できる懐深い街なんですよね。

これからはもっと市の施設を利用しようと思っているんですよ。まずはスポーツ施設のプールで泳いだり体操したりしたいですね。あとはお芝居の漫画を描いているせいもあるでしょう、市民文化会館や吉祥寺シアターといった、催し物ができる場所がいくつも市内にあるので、街全体が劇場になって人が集まってくるような、そんなまちづくりが進んでいったりすれば良いなと思っています。

PRESENT

今回取材した美内すずえさんの直筆サイン入り色紙を抽選で1名様にプレゼント！詳しくは本誌折り込みハガキをご覧ください。